

—貧困の三角形—社会科学の概念—

人間は集団をなして生き、その集団の存続の中に自らの命を託する社会的存在でありながら、同時に生物的個体としての生命活動を営んでいる。

人間における自然（生物学）的な要求の欠乏を絶対的貧困と考えるとき、その最も過酷な状況である飢饉、飢餓が今なお起こる人間社会である。そして豊かな先進国の社会では、その社会の平均的な生活様式を送れないが故の剥奪、そこに引き起こされる人間感情があるとして、社会の平均的な生活様式を送る人々との比較によっておこる相対的貧困が指摘された。そして 21 世紀の今日、今や「社会的排除」と言う新しい貧困からの脱出、「社会的包摂」が先進諸国における政策課題となっている。

1. 社会科学の概念

① 統計的概念をへた抽象概念としての貧困概念

貧困概念の形成は、そのはじまりである絶対的貧困概念の形成過程において、すでに統計的な作業を通して進められ、ブースによる 1886-1902 年の貧困調査（ロンドン調査）は、「近代において、知を生産するために欠かせない方法論となった『測定』という技法¹」により、人間集団としての社会の状態、貧困を統計的研究で分析したものである。

経済統計学会の前身「経済統計研究会」の設立発起人で運営委員であった滋賀大学名誉教授故有田正三博士は、「社会科学的概念と統計的概念」において、いわゆるフランクフルト学派の所説の基本的特徴の一つである統計方法とその客体との間に間隙をおくという考え方について、「・・・社会現象を全体的・質的・意味的なものとし、統計的認識の論理的形式を客体とは独立に存立する、しかも本質的には数理とする所から来る。」としてさらに「方法と客体との矛盾！統計的認識は社会の本質的認識に対して彼岸に立つ。社会科学的認識と統計的認識の間における克服する事の出来ぬ間隙の設定は、しかし、『社会科学的要求にできるだけ一致する統計的結果』を獲得するための努力の断念を意味するものではなく、むしろこの努力の強化を訴えるものである²」との言をひいている。

抽象概念としての社会科学的概念と、社会現象としての具体的概念と、調査概念の間には間隙があり、それはいわば三角形が形成されると言うべきであり、その頂点は理想的にはこの三角形が一点に収斂する事だが、これは現実には望むべくもないので、その間隙が

¹ 小池利彦/平野亮「<測定>の社会学—ケトラーとブース（1）」P3
<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/81002084.pdf> 2012/2/01

² 有田正三
http://libdspace.biwako.shiga-u.ac.jp/dspace/bitstream/10441/3241/2/SJ21_0106_090Z.pdf P2 2012/02/01

可及的に少ない事が望まれ、その為の努力の道筋を求めている³としている。

この問題は貧困概念の形成過程においてその始まりから課せられた課題であろうと思われる。貧困問題は極めて規範的な問題でもあり、貧困実態調査、貧困概念形成過程において、具体的概念と調査概念との間隙を検討することにならざるを得ず、そしてその結果から抽象概念の構築がなされるに当たり、この間隙を前提にして行きつ戻りつこの三角形線上で逡巡、検討がなされざるを得なかったと思われる。

② 社会的に構築されつつある概念の規定

アイデンティ概念、そしてソーシャルワーク概念、社会的排除などは、定義困難と指摘されている。これらは現在進行形で社会的に構築の途上にあって、概念の構成はその外延も、内部の構成要素、それらの関係性も流動的で、現在進行的に変化しつつある構築の途上にある概念ではないだろうか。

アイデンティティ概念に関して興味深い言及がある。「アイデンティティと言う用語の一般化に寄与したエリクソンは、定義的説明は試みずに、アイデンティティがいかに関構築されるのかを理論的に検証するとしている。こうした方法を採用する事でしばしば陥りがちな論点拡散を回避し、アイデンティ概念が有する特質を理解する一助となり得るのでは・・・⁴」としている。

このような概念規定の困難さこそが、これらの概念の特性を表しているとおもわれ、おそらく近代以降、プロテスタンティズムの興隆以降の「熱い社会⁵」の時間の推移の中で、現在進行形で構築されつつある概念なのではないだろうか。

もっとも巷間流布した感のある「熱い社会」について、レヴィ＝ストロース自身はこの言葉は必要な理論的観念装置であり、限界事例を考えているのであって、絶対的に熱い、あるいは絶対的に冷たい社会はどこにも存在しない⁶、熱冷どちらかの両端に位置する社会はどこにも存在しないと説明している。

ところでソーシャルワークの概念規定について、国際ソーシャルワーカー協会は「ソーシャルワーク専門職……人権と社会正義の原理は、ソーシャルワークの拠り所とする基盤である。」とソーシャルワークを定義し、この永い定義の後4項の説明に加え、*(注)として「21世紀のソーシャルワ

³ 有田正三

http://libdspace.biwako.shiga-u.ac.jp/dspace/bitstream/10441/3241/2/SJ21_0106_090Z.pdf P7 2014/02/01

⁴ 吉野良子 http://daigakuin.soka.ac.jp/assets/files/pdf/major/kiyou/17_syakai1.pdf P2 2013/04/29

⁵ レヴィ＝ストロース／エリボン 『遠近の回想』 P225 みすず書房 1991年12月

⁶ レヴィ＝ストロース／エリボン 『遠近の回想』 P225 みすず書房 1991年12月

クは、動的で発展的であり、従って、どんな定義によっても、余すところなくすべてを言いつくすことはできないといってよいであろう。」としている。どのように規定し、定義しても、こぼれる落ちる所が生じて言足りないと言った感の残る、それがソーシャルワークの概念規定である。

このような概念はその特徴を列記して規定し、そこから帰納的に外延を示し、この概念を緻密に規定するという本質主義的な論理構成が困難な概念ではないのだろうか。それを求めると各側面の緻密化が要請されるので、それぞれの側面のあわいが捨象され、概念がやせ細り、概念の全体像から乖離すると言った事を引き起こすのではないだろうか。

新しい貧困「社会的排除概念」も、各機関は統計的作業を重ねて、さまざまに調査概念、具体的概念、社会科学的抽象概念に接近し、概念構築の努力を重ねているところかと思われる。その経過を経て、今社会的に構築されつつある社会問題としての「社会的排除」は、その定義が定まってゆくのであろうと思われる。

③ 概念の重なり合い、隣接する概念との関係

ひとつの概念の定義をする場合は、現実の具体的な事象に対して、ある切り口で分け入って、法則性、傾向性を整理し秩序づけつつ、概念付けを行おうとする事になると思われる。アプローチする切り口、当該概念の使用目的（社会的意味、機能）また事象内部の複層性などにより、その概念は抽象概念として、独立的に概念枠を囲うのであろうが、その概念枠は、それぞれ孤高を保つと言う構成であろうか。

厚生主義的な効用（厚生）概念は物や社会状態などから得られる人間の満足感として定義され、厚生経済学においては貧困や不平等を「効用の少なさ」として測ろうとする。これが厚生経済学的な貧困へのアプローチの手法である。数理的アプローチなので、効用には様々な条件を付して、この条件をクリアできる狭い範囲での妥当性を追いながら概念を枠づけていると言えよう。

一般的には、社会の多様な構成と動的な広がりの中から、一定のまとまった事象をとりあげて概念枠をくくろうとする場合、効用以外の切り口も多数想定され、多様な切り口からアプローチされ得るさまざまな事象は、一定の概念枠でくくられつつも、近接した概念に囲まれている。

近接する概念同士は相互に影響を及ぼす循環関係、一部重なり合う、あるいは下位概念などもあって、概念相互は入り組まざるを得ないと思われ、自身の中に別の概念が含まれている「入れ子」を抱えるなど、概念相互は入り組まざるを得ないと思われる。自身の中に「入れ子」状態に別の概念を抱えている、たとえば「貧困」は「不平等問題」を「入れ子」のように抱えていると考えられる。

また一つの概念を規定する事実関係の様々は、効用ばかりではなく他の要因に影響を受けている。そのためそれぞれ事実関係を拾い上げて概念枠に沿って整理しようとしても、個々の事実関係同士が、分けられた塊として存在しているとも言えない事が多く、実際には分けする事は難しいのではないだろうか。

個々の事実群は、共通の要因から影響を受ける事象を抱えているなど、分けしようとしても互いに重なり合いを有していて、ジグソーパズルをはめ込みむように平面的な広がりの中に隙間なく概念枠を埋め尽くして全体を覆うといった事は現出し難いのではないだろうか。互いに重なり合い、共通な部分を抱えあった構成要素が、互いに膨らみあって交わり、重なり、あるいはずれ込みのような部分を抱えていると考えられる。

このような概念枠の弾力性、三次元的な膨らみと言う事を想定すると、アマルティアセンの貧困や不平等問題における、複数の社会的厚生関数の順位付けにおける、準順位と言う考え方も、その妥当性は説明できるのではないだろうか。

言い換えると、その概念自体が本質主義的に個別、個別に意味をなしているというよりは、そのような概念枠でくくられる事象は、むしろ隣接概念を構成する事象、あるいは対概念や反対概念との関係性の中に、その社会的な意味、輪郭が浮かび上がると思われる。

(伝統的な社会学が「しばしば、それを少数上げて強調すればそれですむとしているような、有名な例外主義⁷」は、ジグソーパズルのように概念をイメージするのであろうか。)

社会科学的な概念は、その概念自体において概念を緻密に積み重ねて完結できるというよりは、むしろ他概念との関係において概念の輪郭、その構造、内容が顕かにされていくのではないだろうか。神話論理の解明は他種族の神話との比較対照によって換喩、暗喩関係が顕かにされ、神話の意味する事が顕かにされると言う分析手法が採られている。

その概念の肉付きの具合、あるいは背骨さえもが、他の概念との関係によって、対比や、差異を通してより顕かにされていくのではないだろうか。特にルネッサンス以降、プロテスタンティズム興隆以降に巻き起こった自由、人権、平等などの抽象概念にあつては、社会的存在としての他者のそれとの相対する関係を通した時に、その外延、構成が明確化されうるのではないだろうか。

人権なども時代とともに新しい人権が構成されている。さまざまな他者の人権や自由との関係、隣接概念(人権、抑圧、平等など)との関係からその外延、社会的意味が、顕かにされると言う事なのではないだろうか。

⁷ クロード・レヴィ=ストロース 監訳 馬淵東一・田島節夫『親族の基本構造(上)』P64

貧困の三角形－貧困の三角形を描く、

2. 貧困の三角形

イギリス由来の貧困概念は、貧困線を設定し、それに満たない低所得状態として定義されている。近代以降、市場経済の席捲する時代を迎え、人間生活は市場に覆い尽くされつつあり、生活物資の交換システムの主要な部分は財市場となっている。(共同体的な交換ルール、所有のルール、相互扶助等の機能する社会もあり、主に発展途上国に存在している。)

人々の生活を覆い尽くす高度産業化社会の財交換の市場においては、貨幣こそが財市場に参入する手立て、権限の源なので、所得情報、貨幣の実質的所有量によるアプローチは、有効な貧困へのアプローチであり、今尚そうであり続けていると思われる。

① 貧困と不平等問題

1998年のノーベル経済学賞を受賞したアマルティア・センが考案した、低所得情報から貧困度を導く社会的厚生関数である貧困指標、「セン測度」は、貧困とは絶対的貧困と相対的貧困(不平等問題)が重なり合っている事象である事を、数理的に顕かにしている。

その一方の絶対的貧困とは、生物学的生命の維持ができない程の生活物資(食糧等)の不足(低所得状態)と定義されているが、レヴィ＝ストロースの言う自然と文化という2項対立関係を受け入れれば「自然状態における人間の要求」「自然(生物)的要求」に対する窮乏(欠乏)と考える事ができよう。

そして他方の相対的貧困は、その社会の平均的生活様式を生きる人々と言う他者との比較において始めて問題になるのであり、社会的文脈の内にある欠落感、剥奪、排除などと表現される格差、不平等問題と考えられる。この貧困は社会内の他者との関係に規定される「社会的要求」に対する窮乏(欠乏)であり、社会の規律を受け入れた文化の状態に移行した人間における、「文化的要求」に対する窮乏(欠乏)と考える事ができよう。

人間においては、社会的要求は文化的要求と循環的であり一体的と考える事ができよう。

相対的貧困は社会を形成し、文化の状態に移行した人間の文化的要求への窮乏(欠乏)であり、この文化的要求が人類史、数10万年の時の経過を経て、多岐に渡り重層化し範囲を広げて不平等の構造を形成し、産業構造や地域の風土にもより、時代とともに変化している。特に「熱い時代」と言われる、近現代の高度産業社会においてその変化は加速され、その先端たるグローバルな経済活動が席捲する現在、21世紀にあつては、その様相はこれまでにない規模と、テンポをもって変化しつつあると思われる。

この不平等問題は、20世紀には所得情報による実態把握で示されたが、21世紀の今日では、「社会関係性」に焦点づけて多焦点的な人間の生活情報による「社会的排除」の把握が

進められており、この問題が貧困実態、貧困の把握として注目されている。この貧困への対応は、排除／包摂と言う構図で、各国の政策課題となっている。

「社会的排除」は不平等の進行を、個々の人間の形成している社会関係に焦点づけて力動的に捉える概念として、「相対的剥奪」の延長上にあり、その関係については「相対的剥奪指標」と「社会的排除指標」を比較対照する時に、その項目の類似性、そして拡大の方向性が、何よりも雄弁にそれを語っているのではないだろうか。

② 貧困概念の枠組み

貧困概念は一部不平等問題を含んでおり、不平等問題と同様の特徴を抱えている事は知られているが、貧困はいわば不平等を「入れ子」状態に抱えている概念であり、そのため貧困は、社会の所得分布の動きに従い、様々な様相を呈して、時代や地域によって焦点を異にしながら拡大、或いは縮小するといった、変化しつつある概念と考えられる。

そして貧困を規定する事象は、人間生活を構成する多焦点的な具体の現実である所から、貧困問題は同時代を生きる人間の悲惨を対象化するという、最も規範性を問われる問題構成であり、論者それぞれのよって立つ価値規範性を反映せざるを得ない問題と考えられる。

そのため貧困概念は、

1. 時代、地域によって異なってくるので、変化を織り込んだ概念構成とならざるを得ず、現実の貧困の様相を背景に、統計手法による実証的把握などの具体性を求められるであろう。
2. しかしながら自然的生物学的な要求への窮乏、絶対的貧困を避けては構成できない。なぜなら絶対的貧困は、死すべき運命を生きる人間にとっての最も重要な問題として、歴史時間を越えてのがれようがない問題として引き続かざるを得ないであろう。
3. もう一方の人間の文化的要求は、ますます拡大し複雑化して展開し、すべての生活分野を覆い尽くしているところから、その要求への窮乏は多焦点的な事項によって規定されざるを得ない。そしてこの要求への欠如は不平等問題としてあらわれている。

この3点を織り込んで、歴史的に提示された貧困概念、その互いの関係、変換の構造を読みとる事により、その内容がより明らかになるのではないだろうか。

③ 2ビットで考える構造

貧困、あるいは絶対的貧困と言うべき事態、食糧の枯渇、この貧困状態は、人間が原始の状態において多く遭遇する事態であろうが、文化の状態に移行してからも「人々にそれと認められつつ」広範に生起する事態である。

レヴィ＝ストロースの言う「それぞれの時代において人間性の限界とみなされている地

点に立って、人間を研究する事にある⁸。」と言う文化人類学のテーマを下敷きにして、文化の状態にある人間生活を眺めるならば、貧困は人間が社会を形成してからもなお、天災地変と社会的（文化的）要因が重なり合う状況、人間の社会生活上の齟齬（不平等）を含みつつ、今なお人間性の限界を超える事態、飢饉や飢餓が繰り返されていると考えられる。

レヴィ＝ストロースは、自然から文化へと移行する過程で、おそらく初期に人間の思考が獲得したであろう「婚姻規則（インセストタブー）」については、「親族の基本構造 87 図」において示し、食べ物に火を入れるという「火の使用」については「料理の三角形」において示しており、其々の構造は 2 ビットの「無意識的な 2 項対立」による変換構造とする。

またレヴィ＝ストロースの研究は「野生の思考」から、さらに神話研究へとすすむのだが、その理由として、自然から文化への移行の様態、異なる二つ（自然と文化）の間を繋ぐ蝶番（ちょうつがい）を包む構造といったものは「無意識と言う形で、人間の精神に現存している。」としても、その事が親族構造では確証できなかったのも、社会生活上の外約規制のより少ない神話研究へと向かったとしている⁹。

この表現からは、親族の構造は確証が困難なほどに複雑となった構造である事が伺われ、「親族の構造」は「婚姻規則（インセスト・タブー）」を受け入れて世代を重ねる中で生成され促されたものであろうから、「婚姻規則（インセスト・タブー）」を起点に世代を経た展開過程として、その構造は変換を重ねて複雑化しているのではないだろうか。

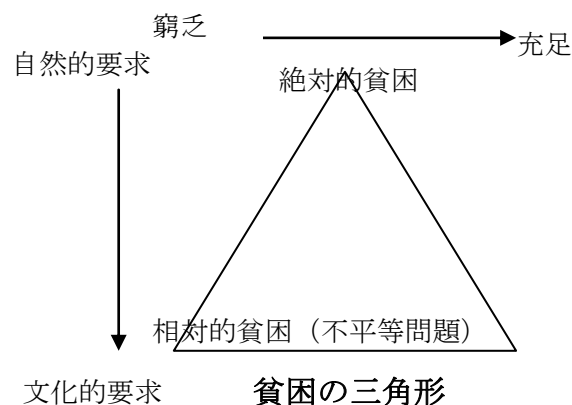
また言語はヤコブソンの 12 ビットの 2 項対立のセット（群）の音素で構成されていると言う、2 ビットより数段に複雑化した構造である。

では貧困の構造はどうであろうか？「婚姻規則（インセスト・タブー）」や「火の使用」の生の肉、焼いた肉の対立関係と同じに、自然と文化の双方を跨いでいる事、絶対的貧困と言う生物学（自然）的条件からの要求の基底性、不平等問題と言う文化的要求の広汎性を考慮すれば、「2 ビットの二項対立軸」と考えてよいのではないだろうか。

④ 貧困の三角形を描く

レヴィ＝ストロースは、ヤコブソンの母音三角形、子音三角形をならい「親族の構造図」（前出）を書いている。

「貧困の三角形」を描くとすれば 2 ビットで右図のように構成されると思われる。



⁸ レヴィ＝ストロース 中沢新一訳『パロール・ドネ』P41 講談社選書 2009 年 6 月

⁹ 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』P117 ちくま新書 265 筑摩書房 2013 年 9 月

貧困とは、人間生活における諸要求に対する窮乏（欠乏）の状態を指しているの、横軸は窮乏（欠乏）の程度を表している。

人間の生活は自然状態から文化の状態へと移行しつつ、文化的要求を複雑化、多重層化、増大させつつある。そこでこの図の縦軸は、人間生活における自然の状態から文化の状態への移行の過程、人間生活における「自然的要求」から「文化的要求」への推移を示している。文化的要求への欠乏は、不平等問題として相対的貧困と重なる。

そう考えると、右上（前ページ）の図のような構成となる。

死すべき運命を生きる人間にとって、絶対的貧困という食糧の枯渇を主とする生活物資の窮乏、餓死、凍死は、歴史時間を越えて永遠に逃れる事はできない問題であろう。

そしてその一方で不平等問題は、20世紀には基本的には低所得として捉えられた相対的貧困であったが、21世紀グローバル経済の席捲する時代、共同体の解体、先進国労働市場の不安定化の中で、社会関係性を軸に捉えられる「社会的排除」として現れている。

この三角形は、底辺部分の変換によってつぎつぎと三角形を生み出すような構造であり、それらの重ね合わせとして示す事が出来ると思われる。不平等問題は時代の動きの中で通時的な変換を行い、多岐にわたり範囲を広げ、互いに重なり合い、底辺は底へ底へと続いてゆく末広がりとなるであろう。

不平等はその焦点を、低所得から「主要な社会関係からの排除」、「社会関係の不十分性」などと移り変わり、「相対的貧困」から「社会的排除」へと変換していると思われる。貧困の三角形は、次々にページを捲ってゆく構成となると思われる。

貧困の三角形－社会保障制度への示唆

3. 社会保障制度への示唆

① 個人の自由と社会システム

人間の社会は、その中に生きる人々の生物個体としての命の継続を、集団の存続に託して集団的規制を生じせしめ、集団を維持し、物を、言葉（情報・文化）を、婚姻の相手（女性）を交換し合い、次世代の親族関係を発生せしめ、互いの集団間の交流を促して生きてきたとレヴィ＝ストロースはいう。しかしやがてその中から、奴隷制度を、様々な収奪、搾取のシステムを発生せしめ、支配者と被支配者階層や階級を生じたのも、人間社会であろう。

この人間社会の中で、最も過酷な場合は餓死をも引き起こす貧困がたびたび人間を襲っており、近代以降、共同体的な相互扶助のシステムが後退し、プロテスタンティズム興隆以降の「熱い社会¹⁰」の中で、都市生活者の多くが絶対的貧困をさまよったわけである。

20世紀には1943年のベンガル飢饉、1970、1980年代にはアフリカ大陸、バングラディッシュでの大規模な飢饉（死者が10万人に及んだとも言われる）が起こり、サヘル砂漠地帯では2010年にも干ばつが襲っている。このような時代において人々の脱貧困を可能にする事、財や生活物資の活用行動上の自由の拡大を問題にするのが、センの貧困へのアプローチである。

センは現下の市場社会、市場原理の社会に生きる人間の幸せを、財活用のための行動の自由の拡大として求め、この文脈から社会保障を問題にし、「自由の平等」を求めている。

一方レヴィ＝ストロースは、アメリカの先住民の滅亡に近い状況を目の前にして、「野生の思考」の中の、論理性、合理性を指摘し支持する。彼は「社会」とは、人間という種の存続に欠かせない「人間にとっての生存条件」、生活財、婚姻の相手、そして様々な情報の、互酬的な交換を行う交流（コミュニケーション）のシステムとして形成されたと言う。

このようなレヴィ＝ストロースの指摘、発見は、自己利益最大化が正しいとして、自分の利益に最大の価値を置き、その利益を得る経過の是非、将来への影響、関係する他者、社会集団への配慮は無視して進んでいく、現下市場原理主義的な行動原理に対する大いなる「過去からの断罪」のように響いてくる。

② 貧困への対応を内包する社会保障の中で考慮されるべきこと

1. 自然（生物）的要求への欠乏として現れる絶対的貧困に対応して、所得保障（市場での生活物資交換権限の保障）・生活物資の現物給付が必要である。
2. 文化的要求への欠乏として現れる不平等問題（相対的貧困）は生活の全分野を覆っているため、これに対して、対人社会サービスにより保健・医療・介護・教育・保育の提供が必要である。

（不平等問題は時代の進展、変化により特徴ある構造となるので、その生成変化を受けて展開する生活支援の専門分業システム、対人社会諸サービスが必要である。その制度の有効な活用、制度の使い勝手を評価するために、利用者の生活要求にそって各制度を繋ぎ合わせる相談、ソーシャルワーク相談が必要不可欠である。）

¹⁰ レヴィ＝ストロース／エリボン 『遠近の回想』 P225 みすず書房 1991年12月

3. 国家や社会が行う社会保障制度を利用する人々への配慮、社会的な偏見、非承認、不平等に配慮せずには、制度は定着しないので、普遍的な社会保障制度が望まれる。(所得要件や障害要件を外し、裕福な人も、貧しい人も共に受給者となる制度である)

そして給付されるすべての人々には、たとえばある種のベーシックインカムを支給されれば、勤労奉仕的な社会貢献(環境保全、介護、家事援助等地域活動、事務作業など)を、数日間義務付けるなど、その全員参加的な協働のシステムの中で、共助、情報交換、交流を促すなどの工夫が必要であろう。

いわば互酬的な社会保障のシステム、人々の物心の交流を促し、互いに生活を潤し合う事ができる社会制度の構築である。

☆☆ 最後に ☆☆

自然状態から文化状態へと移行した人間生活の具体においては、自然的(生物的)要求と文化的要求は重なり合い、一つの具体的な要求の中で上下、左右と分けする事は難しい。貧困はこの二つの要求への窮乏であり、二つの要求が互いに混然一体的に重なりあって厚みをなし、3次元的に膨らみや重なり合いを持っていると思われる。

レヴィ=ストロースは人間の社会は、人の生命、生活の継続を求めて、婚姻規則(インセントタブー)という集団的な規律を受け入れ、その上に親族関係を形成して、親族集団間の交流を生じせしめ、財を交換しあい、次世代における同族的親和関係(コミュニケーション)を促しつつ生き延びて、今を迎えているとしている。

目を転じれば、現代における格差の拡大、文化的要求への欠乏の広がり、**「社会的排除」**として捉えられつつあると思われる。センは近代的自我そのものである**「個人の自由」**の側から自由の平等な保証を求めて、社会制度のあり方、社会保障制度を問題にしている。

我が国においても、若年層の雇用不安、不安定雇用が増大する格差拡大の今日、人間の社会が人間の生存条件(物資、情報、婚姻の相手としての女性)の交換のシステムとして生成された、はるかな昔に求められた社会の機能、役割を、互酬的な交換、交流をうながす社会を、この時代にこそ回復する事が求められているかのようである。

互酬的、普遍的な社会保障制度を構築し、これと並走して、人々が交流を促すシステムをつくり上げ、互いの生活を潤し合う交流が求められている。その中で、我々は自らの象徴機能の展開の上に、豊かさを、幸せを、拓いて行こうとする存在なのではないだろうか。

— 終わり —